

# 琉球使節による和歌の詠作

## ——読谷山王子朝恒の例を中心に——

### 一 はじめに

近世琉球の人々が詠作した和歌については、これまでにもいくつかの論考<sup>(1)</sup>によって紹介がなされてきた。その中でも、江戸上りを行った琉球使節が詠んだものは大いに注目を集めたことが、各種の琉球物刊本に収載されて流布した様相からもうかがわれる。

薩摩藩の支配下に置かれていた当時の琉球王国では、琉球独自の文学が隆盛した一方、和文学も広く享受されていた。人々は和語を駆使して様々な作品を著したが、特に王府の官人たちにとって和歌の詠作が必須の教養であったことや、当時の琉球に多くの和歌集や歌学書類が伝来していたことは、『大島筆記』や『阿嘉直識遺言書』のような資料より明らかになっている。

今回、その和歌を採り上げる読谷山王子朝恒（一七四五～一八一）は、琉球王国第十三代国王である尚敬王の次男で、唐名は尚和。読谷山<sup>ゆんたんど</sup>間切（現在の沖縄県中頭郡読谷村）の総地頭となったことより、読谷山王子と呼ばれる。後に朝憲と名を改めてもいるが、本稿では、江戸上り時の名である朝恒の呼称で統一する。そして、朝恒の和歌を読み解くことで、琉球使節であった彼がどのような思いで和歌を詠んでいたのかを探り、さらにその詠作の意義についても考えてみたい。

### 二 読谷山王子朝恒の詠作

読谷山王子朝恒の文化的事績については、池宮正治による紹介が早くになされており、和歌の他に琉歌も詠み、後に国相ともなった教養人として名高い。朝恒は、江戸幕府第十代將軍徳川家治の即位を祝うための慶賀使として、明和元年（一七六四）江戸に上った。その際に詠まれたとされる朝恒の和歌は、歴代の琉球使節の中で最もまとまった数が残されている。

朝恒は、琉球における和歌の名手として、近代以前の歌人三十六名の和歌一首ずつを集めた、明治三年（一八七〇）宜湾朝保編纂による歌集『沖繩集』——いわゆる「沖繩三十六歌仙」にもその名が挙げられている<sup>(3)</sup>。

梅

朝憲 読谷山王子

玉だれのをすのひまもる春風にさかぬ軒ばも梅が香ぞする（三）

そこには、朝恒を始めとして、元禄頃に琉球と薩摩の間を行き来した際の出来事をつづった和文紀行文『思出草』の作者・識名盛命（一六五二～一七一五）や、和文物語『苔の下』『若草物語』などを遺した平敷屋朝敏（一七〇一～一七三四）も名を連ねている。しかし、その他にはほぼ無名の人物や一首しか和歌が現存していないような人物も多いことから、二十首ほどのまとまった作品が現存する朝恒は、琉球の歌人の中で

鏑 武彦

は注目すべき存在と言える。

その和歌は、近世に多く出版された琉球物刊本に収載されることで、広く巷間の人々の知るところとなった。朝恒の和歌を収載する現存資料のうち、最も早くに成立したものは『三国通覧図説』である。<sup>(4)</sup> 著者は林子平。朝恒の江戸上りから約二十年後の天明五年（一七八五）に出版された刊本で、朝鮮・琉球・蝦夷に関する民俗的な資料である。その中の「琉球」の項に、「前文ニ言シ如ク清主ヨリハ冊封使ヲ遣シ、印璽ヲ与ヘラルレドモ只一代一度ノ大礼耳ニシテ、平生唐山ニ馴親マザル故ニ唐山ノ事ニハ習ハザルナリ。本邦トハ境モ近く、其上薩琉ノ交リシゲキ故、自然ニ大國ノ風ニ化セラレテ、今ハ其國ニテ謡ヲモウタイ、能嚙子ヲモ興行シ、或ハ大橋、玉置等ノ日本流ノ書法モ行ハレ、又本邦ノ平仮名ヲソノ國一統ニ用ルナリ。然ル故ニ和歌ヲモ、ヨミ覚ヘシ由ナリ。近ゴロ明和元年ニ來聘使タリシ、読谷山王子朝恒ノ詠ゼシ和歌アリ。聞シ儘ニ此ニ記ス、琉球ノ本邦ニ化服シタルコト推テ知ベシ」とあり、続いて朝恒の和歌を七首掲載している。

明和元年の秋慶賀使として武蔵の国へ赴ける時、肥前の松浦といふ所へ至り、追風なくて十日余り舟を停し頃よめる

ヨミシザ  
トモツネ  
読谷山王子朝恒

追手ふく風のたよりを松浦がた幾夜うき寝の数つもるらん

伏見の里にて月を見て 同

いつもかくかなしきものか草まくらひとりふしみの夜半の月かけ

深草にて 同

降雪にうづらの床もうづもれて冬もあはれはふかくさのさと

不二山を 同

人間は、いかゞかたらん言の葉も及ばぬふじの雪のあけほの

浮島が原にて

同

ふじの根の雪吹おろす風見へて一むらくもる浮しまがはら

霜月の初つかた武蔵の国に至り、かの所に月を見て 同

旅ごろもはるぐ／＼来ても故さとにかはらぬものはむかふ月かけ

祝 同

波かぜもおさまる君が御代なればみち遠からぬ日の本の国  
この後、「右朝恒ハ本朝ノ学ニ熟シタル故、其ヨミ歌モ和歌ノ体ヲ備ヘタリト云リ」とあり、八丈島に漂着した奄美大島の「中栄」なる人物が琉球方言で詠んだ和歌一首を比較対象として載せ、「右一首ハ琉ノ辺土迄モ、本朝ノ風ニ化シタル証ヲ見スル為ニ挙ルナリ」と注する。

こうして見ると、朝恒の和歌は、当時の琉球で仮名が用いられ、和歌までも詠まれていた状況を紹介するために挙げられている。それによつて日本文化が遠く琉球にも及んでいたことが裏付けられ、琉球王国が幕府に従属する関係にあったことも誇示されたのである。

それから五年後の寛政二年（一七九〇）、『琉球談』が刊行された。著者は森島中良である。掲載箇所の間頭部分を次に引用する。<sup>(5)</sup>

○読谷山王子の和歌

林子平が『三国通覧図説』中の、琉球図説に、「明和元年來聘せし、読谷山王子朝恒が、日本の如く詠ぜし和歌を伝聞せり」とて、わづかに七首を載たり。子が父国訓法眼、明和のはじめ、竹公主の御前に侍りし時、読谷山王子が、手づから書て、笑覧にそなへ奉りたる、道行ぶりの和歌十四首を、御前に侍らひける女房に、写させてたまはりたるを、こよなく秘蔵せられしが、今はむなしき紀念となりぬ。原書のまゝを左に記して、宇留摩の国人の、我國の風に、かくまでなびきたるをしめすのみ。

この後に朝恒の和歌十四首が収載されるが、『三国通覧図説』のもの

は六首が重複している。後に他の資料に拠りすべて引用するので、ここでは割愛する。

なお、著者の森島中良がこの和歌資料を入手した経緯としてここに記されるのは、明和年間の初め頃、幕府の奥医師であった桂川甫三が「竹公主」なる人物に伺候していた際に、「読谷山王子」朝恒自筆の和歌十四首を近侍の女房に書写させて賜ったということである。この「竹公主」は、徳川綱吉・吉宗の養女で島津継豊側室となった竹姫だと考えられている<sup>(6)</sup>。彼女は後に島津重豪を養育したことも知られるが、重豪は明和元年の時点で島津家当主であり、朝恒の江戸上りに際して最も重要な役割を担っていた人物であった。この「読谷山王子が、手づから書て、笑覧にそなへ奉りたる、道行ぶりの和歌十四首」という書き方は、当時江戸在住の竹姫が直接朝恒から和歌懐紙を贈られたようにも受け取れるが、実際にはどうだったのか、この件に関しては改めて検討する。

その約半世紀後、天保三年（一八三二）に刊行された『中山聘使略』は、琉球の地図や風俗、江戸上りに関する様々な事柄を掲載した折本形式の書物であるが、そこにも朝恒を始めとする琉球の何名かの和歌が紹介されている<sup>(7)</sup>。作者は、奥書には「阪本純宅甫」、本によつては「阪宅甫」と記されるが、後者は「本純」が欠落したものと思しい。ここには、『三國通覽図説』の七首、『琉球談』の十四首をすべて含む、二十一首の朝恒の和歌が収載されている点で注目される。もちろん、これ以外の琉球物刊本等にも朝恒の和歌は引用されているが、いずれも『三國通覽図説』や『琉球談』からの孫引きのようなものばかりである。よつて、この『中山聘使略』が現時点では最多となる数の朝恒の和歌をまとめた資料となる。

では、該当部分を見てみよう。「和歌」の項に「国人和歌をよくするもの往々あり。是皇国の淳化遠裔の島嶼に届るを知るべし。因てしる

す」とあり、まず池城親方と真壁親方の和歌二首が掲げられる。

元禄中清の北京にまいりて国にかへりなんとせし時よみ侍る

池城親方

たれも見よ今ぞまことのからにしききたのみやこをたちいづる袖

忍恋

真壁親方賢寛

こゝろのみかよはぬ時はなけれどもよそ目にかゝるほどぞくるしき朝恒の和歌は、その後が続いて二十一首が挙げられている。次にすべて引用し、後の考察のために便宜上○数字を付した。

松浦といふ所にいたりて九月十三夜の月を見て

読谷山王子朝恒

①秋ごとに見しをともとてふるさとのそらなつかしくみゆる月影

追風なしとてかの所に十日あまり舟をとゞめしころ

②追風ふくかぜのたよりをまつらがたいく夜うきねの数つもるらん

須磨の浦にて敦盛の塚を見て

③須磨のうらにちりうくはなの跡とへばあはれとしらぬまつ風ぞふく

伏見の里にて

④たれもかくさびしきものかくさまくらひとりふしみの夜半の月影

辛崎の松

⑤うら風もえだをならさぬ御代なれば猶もさかえんからさきのまつ

真野の入江

⑥しもむすぶ尾ばなが袖につきさえてまの、いり江に千どり鳴なり

鏡山

⑦くもりなき御代のかゝみの山なればさきみが千とせのかけも見へけれ

田子の浦にてふじの山をみて

⑧おもひきや田子の浦辺にうちいで、ふじのたかねのゆきをみるとは

ふじの山を

⑨人とはゞいかゞこたへんことの葉のおよばぬふじのゆきの白たへ  
霜月の初つかたむさしの国にいたりかの所に月をみて

⑩たびごろもはるくきてもふる郷にかはらぬものはむかふ月かけ  
藤枝といふ所にて雪つもりけるあした

⑪夜のほどはくさのまくらに月さえてあさたつべにつもるしら雪  
松尾山

⑫ときはなるいろこそみへね松尾やまみねもふもとも雪のふれ、ば  
深草の里

⑬ふるゆきにうづらの床もうづもれて冬ぞあわれはふかくさの里  
ある人へかへし

⑭そでのゆきあはれをかけしことの葉に君がこゝろのほどもしらなん  
祝の心を

⑮なみ風もおさまるきみが御代なればみち遠からぬ日の本の国  
初春

⑯あづさゆみはるきにけらしあけわたる遠のたかねにかすみたな引  
山家花

⑰はるきても花なかりせばやまぎとはなにのたよりに人めまたまし  
竹林灯

⑱すむやたれ竹のはやしのふかき世にあるかなきかのともしびのかけ  
ふたゝび東におもむく時

⑲富士のねはめづらしければいくたびもはじめてむかふこゝちこそす  
れ  
浮島がはらにて

⑳ふじの根のゆき吹おろすやま風にひとむらくもるうきしまが原  
二階氏に贈る

㉑ふみそめしあとをむかしのちぎりにてなをしるべせよしきしまの道

この後、東風平里之子・宜野湾王子・中榮の和歌各一首が挙げられる。  
中榮の詠は、前述の『三国通覧図説』所収のものと同く同じである。

淀の舟にて女に物を贈るとて  
東風平里之子  
ぬしやたれうき名たつとも空だきのけぶりくらぶることもあらばや  
寛政己酉来聘の時  
宜野湾王子

かぎりなき山をいくえかながめきてそれぞとしるき雪のふじのね  
八丈ヶ島にて  
中榮

ながれ舟よるにおんかみさまをがでおよせうる事のうなつかしゆな  
ん

末の一首はかの属島大島の人さきの年八丈に漂流しけるに土  
官のあつきめぐみにあひしを嬉しうおほえし余り己が陋拙を  
わすれて胸懐を述しなり是また 皇化の夷蛮に及ぶを仰ぐべ  
し

ここに挙げられた和歌のうち、池城親方安憲の詠作は、これとほぼ同  
じものが『沖繩集』等に採られていて、かなり人口に膾炙していたら  
しい。真壁親方賢寛は、正しくは賢宣であり、『正本のかつら』にこの  
歌も収載されている。宜野湾王子朝陽は朝恒の甥に当たる人物で、寛政  
二年（一七九〇）に慶賀正使として江戸上りをしており、東風平里之子  
朝行はその際に同行したことが確認できる。中榮については前述。こう  
して見ると、やはり歌数からしても朝恒は群を抜いている。それ以上に  
多くの和歌を詠んだ歌人がいれば、おそらく何らかの形で詠作が伝来す  
るはずなので、朝恒が近世琉球における歌人としては随一の人物と見な  
されていたことは確かであろう。

この朝恒の和歌①～②については、これまでに挙げた琉球物刊本のほ  
か、文政十一年（一八二八）に薩摩の川畑篤実が編纂した『松操和歌集』  
にも七首が収められる。『松操和歌集』は、主に薩摩歌壇における様々

な人物の詠作を集めた私撰集で、その中に琉球の人物の和歌も計十六首収載されているが、そのうち朝恒の和歌は七首あり、いずれも先行する『琉球談』収録の十四首と一致する。

また、もう一つ新たに紹介しておきたい資料がある。『読谷山王子旅中のすさみ』は、国会図書館憲政資料室に旧三条家文書として所蔵されている写本で、朝恒の和歌十四首を収めたのみの小さな歌集である。『琉球談』の詠とは一首のみ入れ替わりがあり、その一首は『三国通覧図説』には収載されている。これがいつどのように作成されたものかは不明だが、いずれの資料とも収載歌が完全に一致することはない点は注意される。

次に、それぞれの資料で朝恒の和歌がどのような順序で掲載されているかを示す。これまでに紹介した五つの資料のうち、朝恒の和歌の収載歌数が多いのは『中山聘使略』であるので、『中山聘使略』における配列順序を基準とする。前に『中山聘使略』で引用した○数字の和歌が、各資料ではどの順で収載されているのかを、下の各欄に数字で記したものが下の〔表1〕である。また、『松操和歌集』は歌番号で表記している<sup>(1)</sup>。

これを見てみると、それぞれの歌の配列が資料ごとに入り乱れていることに気付かされる。今回採り上げた朝恒の和歌は、主に江戸上りの旅の道中に詠まれたものであるが、その配列がこのように錯綜しているということは、この歌群が琉球の人物が詠んだ和歌として喧伝されて流布していく中で、本来の歌順が判然としなくなっていたのが原因かと考えられる。率直に考えてみると、最も歌数が多い『中山聘使略』の本文がいずれの資料よりも正しく原態を留めているものと推察されるが、その仮定に基づき、その歌順に従ってこれらの和歌を見ていくと、詞書や歌の内容から、次のように区分することができる。

〔表1〕各資料における和歌の収載状況

『中山聘使略』	琉球物刊本		歌集	
	『三国通覧図説』	『琉球談』	『松操和歌集』	『旅中のすさみ』
①あきごとに		1	秋・424	1
②おひてふく		2	羈旅・823	2
③すまのうらに		3		3
④たれもかく		2		11
⑤うらかぜも		4	羈旅・740	4
⑥しもむすぶ		5		5
⑦くもりなき		6		6
⑧おもひきや		7	羈旅・742	7
⑨ひととはば		8	羈旅・743	8
⑩たびごろも	6	9	羈旅・744	9
⑪よのほどは		10		10
⑫ときはなる		11		12
⑬ふるゆきに		12	羈旅・741	13
⑭そでのゆき		14		14
⑮なみかぜも	7	13		
⑯ふじのねの	5			

(注) ○数字は『中山聘使略』の配列順、数字は各資料における配列順を表す。  
 『松操和歌集』は部立・歌番号を示す。  
 『旅中のすさみ』は『読谷山王子旅中のすさみ』。



- ① …肥前国松浦での詠作（詞書による）  
 ② …撰津国須磨での詠作（詞書による）  
 ③ …山城国伏見での詠作（詞書による）  
 ④ …近江国の歌枕「辛崎の松」「真野の入江」「鏡山」を詠む  
 ⑤⑥⑦ …駿河国田子の浦で富士山を詠む（詞書による）  
 ⑧ …富士山を詠む  
 ⑨ …江戸での詠作（詞書による）  
 ⑩ …駿河国藤枝での詠作（詞書による）  
 ⑪ …山城国の歌枕「松尾山」「深草の里」を詠む  
 ⑫⑬ …贈答歌の返歌  
 ⑭ …祝の歌  
 ⑮ …題詠歌  
 ⑯⑰⑱ …富士山を詠む（二度目の上京時？）  
 ⑲ …駿河国浮島原での詠作（詞書による）  
 ⑳ …二階堂氏へ贈った歌  
 ㉑

このうち、①～⑬は歌枕や地名が和歌や詞書に含まれているので、詠作順序を考える上での判断材料となり得る。但し、詠作事情に不審があるのは⑱で、詞書に「ふた、び東におもむく時」と記され、富士山が詠まれているが、朝恒が江戸上りをしたことが確認できるのは、明和元年の一度だけである。後に琉球から薩摩までは二度訪れていることが『中山世譜』より確認できるが、当時の琉球の高官の人物がそう何度も江戸まで行くことができたとは思えないので、この詞書には疑問が残る。さらに、この後の㉑は配列からすると二度目の江戸上りの際の詠ということになり、やはり同様に不審が残る。なお、最後の㉑の詞書にある「二階氏」とは、薩摩の「二階堂氏」だろうか。

この区分と前掲〔表1〕に見た各資料の配列を考え合わせた場合、矛

盾が生じるのは、次の三点である。〈1〉『三国通覧図説』や『松操和歌集』では、⑬「ふるゆきに」詠が往路での詠のように配列されている。〈2〉『琉球談』には収められない④「たれもかく」詠が『旅中のすさみ』では復路での詠のように配列されている。〈3〉前述のように、『琉球談』に収載された朝恒の和歌が江戸滞在時に竹姫へ直接託されたものとする、藤枝で詠まれた旨が詞書に記される⑪「夜のほどは」詠が往路の詠と見なされる。

次に、この三点を解決するために、現存する記録類を辿りながら、朝恒の江戸上りの具体的な日程を調べてみたい。

### 三 朝恒の江戸上り

琉球王国の正史『中山世譜附卷』（巻四、尚穆王）には、琉球・薩摩・江戸の三地点の発着に関する大まかな日程のみが次のように記される。<sup>(12)</sup>

（乾隆）二十九年甲申。為慶賀 將軍家治公。膺襲封事。遣正使。尚氏読谷山王子朝恒。副使。向氏湧川親方朝喬。六月二十日。到薩州。十一月初九日。到江府。翌年二月初四日。回到薩州。三月十六日。回国。

一方、薩摩藩側の記録である『旧記雑録追録』（巻一二一、重豪公）では、往路・復路について、それぞれ次のように記される。<sup>(13)</sup>

#### 〈往路〉

嚮是 故大樹家重公讓政務於 右大将家治公退休于 西城、由是琉球国司尚穆從先躅、遣賀使読谷山王子於江府、獻方物於 將軍家、以故今茲王子葦航来于慶府、八月二十三日發慶府赴東武、令家老川田伊織国福・用人岩下佐次右衛門方峰・近習役島津矢柄久壽・留守居有川勇馬馬厚・使番矢野清右衛門清香等附護之、晦日解纜於薩州、久見崎港 九月二十九日繫長州赤間関、十月九日着船于撰州大坂、

到是留滞五日、十五日遡河流、翌日到于城州伏見、三宿而發伏見、經美濃路東海道、十一月九日到著于江府芝郎、即日遣留守居于老中之第、報琉使來着之事、

〈復路〉

中山王信使王子読谷山嚮以使節礼畢故、迄尾張黃門宗睦卿・紀伊黃門宗將卿・水戸參議宗翰卿・徳川參議宗武卿・同參議宗尹卿・同三位中将重好卿及台老・京都所司代・大坂城代・若年寄以下管事庶達官等謝之贈物、各有差矣、既而今茲十二月十一日琉使發於江府、令家老川田伊織國福・用人鳥津登久連・近習役関山新左衛門金郷・使番本田六左衛門親相附護之、即經歷東海道美濃路、閏十二月四日到大坂、同九日發大坂、駕船回西海、翌年正月廿八日着船于薩州久見崎港、二月四日到着于薩府、自是琉人期順風、泛船而南帰、

これを見ると、さらに詳細な日程として、鹿兒島を出発した一行は久見崎（現在の薩摩川内市）から船で大坂へ、そこから淀川を遡上して伏見へ、その後東海道美濃路を経て江戸へ赴いたことが明らかにされる。これは当時の江戸上りの一般的なルートだったようである。<sup>14)</sup>

そして、琉球使節自身による旅の記録も、琉球の家譜に残されている。明和元年の琉球使節の氏名は『通航一覽』等で明らかにするが、その家譜が現存する者のうち、正使に次ぐ任となる副使を務めた湧川親方の家譜「向姓家譜（湧川家）」（十二世朝喬）には次のように記される。<sup>15)</sup>

（乾隆二十九年）六月初七日那覇港候風之時又蒙 王上遣使賜于（干カ）菓子一籠初九日開船十一日板敷祝之時復蒙 王上及 国祖母 国母 国妃各遣使道喜併賜御花一籠御玉貫一双十三日船至山川二十日到慶府七月十一日上城行朝覲礼（此時乘輪並有路次楽行列旧例随 太守公同赴江戸今番 太守公懼寒而先赴不偕球人往也）二十一日拝謁大雄山宮及南泉院進獻大官香各四把（此時奏音楽着漢衣冠乘輪並

有路次楽行列）二十二日謁福昌寺浄光明寺亦獻大官香各二把八月初一日進城行賀朔礼併獻礼物初三日謁諏訪宮（着漢衣冠乘輪並有路次楽行列）二十三日慶府起程十月十一日到大坂薩州公館蒙令看竹田絡及做戲狂言併賜宴席十五日發棹十一月初九日到江府先入芝殿朝見 太守公礼畢退入公館食宴：（中略）：（十二月）十一日江府起身於翌年閏二月初四日到慶府進城謁見御家老稟明江戸公務十八日蒙 令許回併荷 太守公賜御茶十斤白麻十五束二十八日登舟三月初三日慶府開船到山川十一日収大島住用浦十六日帰国

これを見ると、薩摩における到着地点は鹿兒島の外港であった山川港（現在の指宿市）で、その後鹿兒島に二ヶ月ほど滞在して寺社参詣などの行事が行われたことがわかる。また、大坂では「竹田絡及做戲狂言」——竹田座のからくり人形や芝居、狂言を鑑賞しており、使節の人々が日本の流行芸能に触れる機会も用意されていた。もちろん、その後の最終目的地である江戸においても様々な催しがあったことは『通航一覽』等に詳しいが、本稿では割愛する。

同様の旅の記録は、使節に同行した楽正・小禄親雲上や楽童子・田島里之子の家譜などにもあり、小禄親雲上の家譜「向姓家譜（小禄家）」（九世馬亮功）には「十月十一日到大坂同十三日蒙 旨看竹田絡併躍狂言同十五日起棹次日到伏見同十九日起程十一月初九日到江府即日朝見 太守公同」（十二月）十一日江府起程翌年正月朔日回到伏見同初三日到大坂同十三日開船二月二十八日到薩州京泊閏二月初四日回到慶府」の如く、湧川親方の家譜よりも多少詳しく道程が記されている。前掲の薩摩の記録と比較すると、特に薩摩（大坂間は航海の都合からか船の到着日に多少の日程のずれがあるほか、閏月が薩摩の暦では明和元年の閏十二月、琉球の暦は翌明和二年の閏二月に設定されていることなどの違いがある。これは、薩摩では宝暦暦を使用していたのに対して、琉球では清朝と同

じ時憲曆を基本とした曆を使用していたことによるものである<sup>17)</sup>。但し、前掲の『中山世譜附卷』は薩摩と同じ宝曆曆に従っており、資料によって異なる曆が採用されていた。

これらの記録を総合してみると、左に掲げた〔表2〕のように、朝恒の江戸上りの日程を整理することができる。その上で、前節の最後に提起した問題点〈1〉～〈3〉について改めて考えてみよう。〈1〉⑬「ふるゆきに」詠はおそらく題詠歌なので、明確に往路・復路どちらの詠であるのかを確定することはできないが、歌枕「深草の里」を詠む⑬の歌が、「松尾山」を詠む⑫の歌と共に地理的にも近い伏見滞在時に詠まれたものとするならば、二首共に雪が詠み込まれることから、伏見滞在が初冬であった往路より、冬の終わり頃であった復路での詠作と考えるのが妥当であろう。〈2〉④「たれもかく」詠は『中山聘使略』の詞書では「伏見の里にて」とあるが、朝恒が伏見に滞在したのは、往路は十月半ば、復路は一月初め（時憲曆）であり、この歌が実際に「夜半の月影」

〔表2〕朝恒の江戸上り日程（明和元年～二年）

		琉球
	6/9発 ↓	山川
	6/13(12)着 ↓	鹿児島
	6/20(21)着 8/23発 ↓	久見崎 (京泊)
	8/30発 (★赤間関 9/29着) ↓	大坂
	☆10/11着 (★10/9) 10/15発 ↓	伏見
	10/16着 10/19発 ↓	江戸
	11/9着	
復路		
3/16着		
↑ 3/3着 3/10発 (住用浦 3/11着)		
↑ ☆関2/4着 (★2/4) 3/3発		
↑ ☆2/28着 (★1/28)		
↑ ☆1/3着 (★関12/4) ☆1/13発 (★関12/9)		
↑ ☆1/1着		
↑ 12/11発		

〔注〕☆…琉球の家譜における日付。★…薩摩の記録における日付。

を見て詠まれたものとする、復路では夜半に月が出ているはずがなく、日程的にあり得ない。おそらくは往路に詠まれたものとして間違いないであろう。〈3〉⑪「夜のほどは」詠は、『中山聘使略』の詞書では「藤枝といふ所にて雪つもりけるあした」とあるが、朝恒が藤枝を通過したと考えられるのは、往路は十一月初め頃、復路は十二月半ば頃と計算できる。和歌には「夜のほどはくさのまくらに月さえて」と詠まれることから、これは復路でないとはあり得ない。

以上から、歌の配列に関しては、⑬が前に置かれる『三国通覧図説』、④が後に置かれる『読谷山王子旅中のすさみ』には錯誤が生じており、これらの資料よりも『中山聘使略』の配列が正しいと見なされる。また、『琉球談』収載の十四首は、森島中良の言に拠ると、朝恒の江戸滞在中に竹姫へ直接渡されたものではなく、復路の京以西の地点において記された朝恒の直筆歌稿が、おそらくは薩摩藩の人物を介して間接的に竹姫に贈られたものであることも推察される。それが、琉球王国の王子が詠んだ珍しい和歌という名目で、竹姫に近侍した森島中良の父である桂川甫三が入手して、後に『琉球談』に掲載されることになったのである。そうすると、一方では薩摩にもその元となった朝恒の歌稿が存在していたと仮定できるが、それが『中山聘使略』にまとまって掲載されたとも考えられる。『三国通覧図説』著者の林子平も何らかの経路で朝恒の和歌を聞き知っていた訳であるから、当時、朝恒が優れた和歌を詠むという話かなり広まっており、その歌稿がいくつかのルートで書写を繰り返されて流布したものであろう。資料によって収載歌や歌の配列が異なっていることも、それを物語っていると思われる。それほど、朝恒の和歌は当時の人々に多大な関心をもって受け入れられたのである。



#### 四 朝恒の和歌を読む

では、次に朝恒の江戸上りにおける和歌を読み、その特質を確認しておきたい。前節で歌の配列は『中山聘使略』のものが正しいと述べたが、各資料間における和歌本文の主な異同は次のようになっていいる。なお、各資料を表す記号は、A『三国通覧図説』、B『琉球談』、C『中山聘使略』、D『松操和歌集』、E『読谷山王子旅中のすさみ』とする。

①結句 B E 見つる月影 — C みゆる月影 — D 向ふ月かげ

③結句 B 春風ぞふく — C E まつ風ぞふく

④初句 A E いつもかく — C たれもかく

二句 A E かなしきものか — C さびしきものか

⑨二句 A B D いかゞかたらん — C E いかゞこたへん

結句 A D 雪のあけぼの — B C E 雪の白妙

⑮結句 A C 日の本の国 — B E 日の本の里

⑳三句 A 風見へて — C やま風に

これを見てみると、③のB「春風ぞ吹く」という本文は、この配列順序からすると須磨を訪れたのは往路であり、時期は晩秋となるため、C Eの「まつ風ぞふく」が本来の形であったと思われる。須磨での戦いに散った敦盛を喩えた「ちりうくはなの跡」という表現があるための誤写であるうか。また、⑮も、A Cの「日の本の国」が正しいことは明らかである。その他に関してはいずれの本文でも差し当たり解釈は可能だが、最も歌数の多いCの『中山聘使略』の本文がやはり最も整っているように見受けられる。よって、前掲の『中山聘使略』の本文に拠りつつ、以下に各歌に関する考察を加えていきたい。<sup>18)</sup>

まず、朝恒の和歌二十一首を詠作機会別に次の三つに分類し、それぞれ

れの歌の表現にも注目しながら検討することとする。

##### 1 旅情を詠んだ歌

①②③④・⑧⑨⑩⑪・⑱⑳

##### 2 題詠歌

⑤⑥⑦・⑫⑬・⑮⑯⑰⑱

##### 3 贈答歌

⑭・⑳

1 〈旅情を詠んだ歌〉の十首は、江戸上りの旅における朝恒の様々な思いが率直に表れている詠作と言えるであろう。①④、⑧⑪はそれぞれ、松浦・須磨・伏見・田子の浦・富士山を望む地・江戸・藤枝において詠まれたものである。数は少ないながら、和歌を順に詠むことでまさに旅日記のような役割を果たしている。ただ、⑱⑳の二首は、詞書にあるように本当に二度目の上京時のものなのか、実際は明和元年時の上京時のものなのか、あるいは他人の詠作であるのかは現時点では不明とせざるを得ない。

これらの歌を見てみると、①②④⑩の郷愁の念を詠んだ歌がまず目に付く。やはり、海に向こうの琉球から遙か遠くの地へ来たことによる心細さは想像するに難くない。こうした詠において、先行歌と類似した表現を用いた例がいくつも見られる。例えば、①「秋ごとに見しをともとてふるさとのそらなつかしくみゆる月影」は、『十六夜日記』における鎌倉の阿仏尼と京の為子との贈答歌「東路の空なつかしきかたみだに忍ぶ涙にくもる月かげ」(一一五・為子)、「かよふらし都の外の月みても空なつかしきおなじながめは」(一一六・阿仏尼)と状況や表現が共に近い。また、②「追風ふくかぜのたよりをまつらがたく夜うきねの数つもるらん」は、「恋ひわぶる袖のみなどの浪枕いく夜うきねの数つもるらん」(新統古今集・恋二・一一三五・忠良)の下の句と、④「たれ

もかくさびしきものかくさまくらひとりふしみの夜半の月影」は、「い  
つもかくさびしきものかつのくにのあしやのさとの秋のゆふぐれ」(続  
古今集・秋上・三五九・家隆)の上の句、「とことには誰がことのほは  
かつこむらんひとり伏見の里の月かけ」(建保名所百首・七三二・伏見  
里・康光)の下の句と、それぞれほぼ同じような表現を用いており、朝  
恒がこうした中世和歌に触れる機会が十分にあったことを想定させる。

一方、明らかな古歌撰取の例として、⑩「たびごろもはるくきても  
ふる郷にかはらぬものはむかふ月かげ」は、『伊勢物語』の「から衣き  
つつなれにしましあればはるきぬる旅をしぞ思ふ」(第九段・一  
〇・男)を踏まえたものである。男が三河国八橋で京に残してきた女を  
偲ぶこの古歌が、同じような状況下で朝恒の念頭にあったことは間違  
ない。この歌は、中世においても「旅衣はるばるきぬる八橋のむかしの  
跡に袖もぬれつつ」(新拾遺集・羈旅・八一〇・為家)のように本歌取  
りされており、朝恒の撰取もこうした伝統に則ったものであった。

同様の古歌撰取は、田子の浦から富士山を望んだ⑧「おもひきや田子  
の浦辺にうちいで、ふじのたかねのゆきをみるとは」にも顕著である。  
この歌は、「田児之浦從 打出而見者 真白衣 不尽能高嶺尔 雪波零  
家留」(万葉集・卷三・三一八・赤人)を本歌取りしたものである。『新  
古今集』にも「たこのうらにうち出でてみれば白妙の富士のたかねに雪  
はふりつつ」(冬・六七五・赤人)と採られ、当時の琉球の文化人なら  
知らない者はいなかったと思われる。朝恒は、山部赤人が田子の浦で雄  
大な富士山の景に感嘆した古歌を本歌とすることで、自らも同地に立つ  
てその驚きを追体験しているのである。

また、⑨「人とはいかにこたへんことの葉のおよばぬふじのゆきの  
白たへ」は、「ことのはもおよばぬふじのたかねかな都の人にいかかか  
たらん」(続千載集・羈旅・八三九・有房)にかなり表現が重複してい

る点に注意される。上の句は「人とは袖をばつゆといひつべしなみだ  
の色をいかにこたへん」(続後撰集・恋一・六八三・俊成)のような他  
例もあるが、全体的に類似していることは否めない。こうした歌が念頭  
にあったものか、あるいは偶然の類似かは断じることができないが、こ  
の朝恒の歌には、雄大な富士山に降り積もる真っ白な雪を見て言葉を失  
うほどに感動した気持ち素直に表現されている。

2〈題詠歌〉の九首は、⑤⑥⑦は「辛崎の松」「真野の入江」「鏡山」  
と近江国の歌枕を、⑫⑬は「松尾山」「深草の里」と山城国の歌枕を詠  
む。江戸上りの経路である東海道沿いに位置する鏡山の詠は旅中の作と  
見なすことも可能だが、琵琶湖の湖西に位置する唐崎・真野は東海道か  
らは外れるため、これら三首は共に、おそらく近江国のどこかの地点に  
おける歌会のような場で詠まれた題詠歌と想定した方が良さそうである。  
⑮は「祝の心を」という詞書と歌の内容から、これも何らかの公的な場  
で詠むことを求められたものと思われる。⑯⑰⑱は「初春」「山家花」「竹  
林灯」と、特に前二首は春の歌題であり、暦の上での春に詠まれる詠と  
してふさわしい。これも朝恒の実作であるとするならば、宝暦暦では明  
和元年の閏十二月十五日が立春であることから、復路の大坂出航後のど  
こかの地点で詠まれたものと推定される。

⑤「うら風もえだをならさぬ御代なれば猶もさかえんからさきのまつ」、  
⑦「くもりなき御代のかみの山なればさみが千とせのかげも見えけれ」  
はそれぞれ、後鳥羽院の治世に言及した「春風の枝もならさぬ御代なれ  
ばのどかに花の色も見えけり」(正治初度百首・春・一〇一七・経家)、  
寛喜元年女御入内屏風歌である「うちはへて世ははるならしくかぜも  
枝をならさぬあをやぎのいと」(新勅撰集・春上・二八・実氏)や、神  
楽歌の「みがきける心もしるく鏡山くもりなきよにあふがたのしさ」(拾  
遺集・神楽歌・六〇六・能宣)、天仁元年大嘗会悠紀屏風歌である「く

もりなききみが御代にはかかみ山のどけき月のかげも見えけり」(続後撰集・賀・一三六七・匡房)のような先行例に見られる平和な世を祝う表現を用いていることから、朝恒自らが將軍を慶賀する立場にあることを考慮しつつ、こうした例を踏まえて公的な場で詠むにふさわしい表現を用いたことがうかがわれる。

また、⑥「しもむすぶ尾ばなが袖につきさえてまの、いり江に千どり鳴なり」は、俊頼の代表歌「うづらなくまののいりえのはまかせにをばななみよる秋のゆふぐれ」(金葉集・秋・二二九九)を、⑬「ふるゆきにうづらの床もうづもれて冬ぞあはれはふかくさの里」は、俊成の代表歌「夕されば野べのあきかせ身にしみてうづら鳴くなりふか草のさと」(千載集・秋上・二五九)を踏まえるが、前者では「尾ばなが袖」、後者では「うづらの床」といった先行例はあるものの比較的珍しい表現を用いている。名歌に拠りつつも、独自性を出そうとしたのであろう。特に前者は、中世王朝物語である『言はでしのぶ』の「ちぎりこし露のことはちりはててを花がそでにしもむすべとや」(二四七・女四の宮)にかなり類似しているが、この歌の影響があったのだろうか。

そして、⑮「なみ風もおさまるきみが御代なればみち遠からぬ日の本の国」には、朝恒の日本という国家に対する意識が見て取れる。特に結句の「日の本の国」という直截的な表現が目を引くが、これには「代代たえず法のしるしをつたへきてあまねくてらす日の本の国」(続千載集・雑体・七〇六・龜山院)のような先行例もある。この朝恒の詠はあくまで公的な和歌であるが、やはり慶賀正使としての朝恒が自らの責務を強く自覚して詠んだ歌であろう。当時の琉球王国は江戸幕府に従属する立場にはあったが、その状態にあったとしてもこのまま平和な世が続くことが最も望ましいと朝恒は願っていたものと考えられる。大海で遠く隔てられた琉球と日本の「みち遠からぬ」良好な関係を維持すべきという

思いが、この朝恒の和歌に込められているようである。

#### 四 おわりに——朝恒が和歌を詠む意味——

朝恒自身の思いが最も率直に表れているのは、3(贈答歌)であろう。⑭「そでのゆきあはれをかけしことの葉に君がこゝろのほどもしられん」は、袖に降りかかる雪が詠まれることからこの配列位置が妥当であり、江戸上りの任も無事に終わりが見えて緊張もほぐれた頃、「君」なる人物に受けた労わりの言葉に感謝の念を述べたものと思われる。また、⑯「ふみそめしあとをむかしのちぎりにてなをしるべせよしまの道」は、和歌の道で自身を導いてくれた薩摩の二階堂氏のある人物に対して、今後とも引き続き鞭撻を仰ぎたいという、歌道の師へ寄せる信頼の思いを詠んでいる。朝恒が和歌を重んじる気持ち垣間見られる一首である。こうした歌を読んでもみると、なぜ朝恒は和歌を詠んだのか、ということがわかってくる。日本文化に造詣の深かった朝恒は、日本の伝統文芸である和歌の力によって、国家間の枠を超え、琉球を代表する者として、徳川將軍の治世を壽ぎ、日本人々との交流を試みた。朝恒は和歌を媒介にして、琉球と日本との間の友好関係をより確かなものとすることを自らの務めと考えていたはずである。琉球使節が詠んだ和歌には、他国の文化を巧みに採り入れ、国家の繋がりを尊重することで繁栄を築き上げてきた琉球の人々の精神が反映されているのだと言えよう。

#### 注

(1) 池宮正治・嘉手苺千鶴子・外間愛子編『近世沖繩和歌集 本文と研究』(ひるぎ社、平二)、嘉手苺千鶴子「近世沖繩の和歌」(『おもしろ琉歌の世界——交響する琉球文学——』森話社、平一五。初出は『歌謡——文学との交響——』臨川書店、平一二)、中澤伸弘

「近世後期琉球と和歌の受容」(『神道宗教』一九七、平一七・一)、  
屋良健一郎「琉球人と和歌」(東京大学日本史学研究室紀要 別冊  
『中世政治社会論叢』、平二五・三)。また、琉球使節の行った文学  
活動については、宮城栄昌「琉球使者の江戸上り」(第一書房、昭  
五七)に詳しい。

(2) 池宮正治『近世沖繩の肖像——文学者・芸能者列伝——』(ひる  
ぎ社、昭五七)。

(3) 注(1)前掲『近世沖繩和歌集 本文と研究』より引用。

(4) 『三国通覧図説』は、早稲田大学図書館蔵の版本を翻刻して引用。

(5) 『琉球談』は、早稲田大学図書館蔵の版本を翻刻して引用。

(6) 東喜望「森島中良と琉球使節」(『叢書江戸文庫月報』三二、平六・  
八)。

(7) 『中山聘使略』は、『江戸期琉球物資料集覧』第四卷(本邦書籍  
昭五六)より引用。

(8) 一見すると同一の版本のようでも、注(7)前掲書所収本では前  
者だが、例えば琉球大学図書館仲原善忠文庫蔵本では後者のよう  
になっている。

(9) 注(1)前掲『近世沖繩和歌集 本文と研究』参照。

(10) 注(1)前掲屋良論文参照。

(11) 『松操和歌集』の本文・歌番号は、福井迪子・橋口晋作・田中道  
雄編『松操和歌集 本文と研究』(鹿児島県立短期大学地域研究所、  
昭五五)に拠る。

(12) 琉球資料叢書『中山世鑑 中山世譜附卷 中山世譜訂正案』より  
引用。

(13) 『鹿児島県史料 旧記雑録追録』巻二二一・重豪公、往路は一〇  
九号、復路は一三三号より引用。

(14) 琉球の江戸上りの旅程については、注(1)前掲宮城著書、横山  
學「琉球国使節渡来の研究」(吉川弘文館、昭六二)等に詳しい。

(15) 『那覇市史 家譜資料(三) 首里系』より引用。

(16) 同。

(17) 高田紀代志「近世琉球の暦 試論——大清時憲曆と選日通書——」

(『沖繩研究ノート』二、平五・二、同「近世琉球の暦をめぐって  
試論その2」(『沖繩研究ノート』三、平六・二)。

(18) 以下、本節における本歌・参考歌の引用・歌番号は、『新編国歌  
大観』に拠る。また、『中山聘使略』の和歌の引用は、一部仮名遣  
いを改め、本文を校訂した箇所があるが、その場合は元の本文を右  
傍( )内に示した。

#### 〔付記〕

本稿は、平成二十五年度早稲田大学国文学会秋季大会における研究発  
表「読谷山王子朝恒の和歌」の一部内容を発展させ、立教大学日本学研  
究所平成二十六年一月研究会「琉球・薩摩と東アジア——人と文物の往  
還——」において行った研究発表をもとに成稿したものである。口頭発  
表の席上ご教示を賜った諸先生方に、心より感謝申し上げます。

(神戸女学院大学非常勤講師)